

3 研究目的

サンゴや藻場に代表される沿岸生態系は高い生態系サービスを有しているだけでなく、水産資源を直接的に育むゆりかごとしても極めて重要である。一方、地球温暖化・海洋酸性化・貧酸素化といった全球的な要因や、過剰漁業・土地利用変化・富栄養化といった局所的な要因が複合的に重なり合い、沿岸生態系の分布・多様性・機能は変化しており、将来の人間社会に対する影響も懸念されている。これらの要因に対する沿岸生態系の影響評価・予測が国内外の様々な大型プロジェクトのもと推進されているが、プロジェクト間の相互の情報交換や連携は十分とはいえない。このような背景に鑑み、本ワークショップを参加者各人のこれまでの研究成果を持ち寄り、情報交換を行うことで沿岸生態系の評価・予測に関する相互理解を深め、今後の研究推進と相互協力・共同研究の契機とする。

4 研究内容

代表者（藤井賢彦）、分担者（吉田吾郎）と拠点対応教員（吉江直樹）がコンビーナーとなり、令和元年 12 月 3 日、4 日の両日に島根大学エスチュアリー研究センターにて、同センターの共催を得て標記ワークショップを開催した。本共同研究助成を得て旅費を支給した 7 名を含む 40 名の参加を得ることができた。具体的な研究発表内容については、別添のプログラムを参照されたい。

1 日目は開催に際して、代表者の藤井と南（島根大学）からワークショップの趣旨説明を行った後、10 名の研究者・学生による研究発表を得た。

2 日目は 9 名の研究者・学生が研究発表を行った後、同センターの協力を得て、国内でも珍しい汽水域に特化した水族館を含む島根県立宍道湖自然館ゴビウス、並びに宍道湖で巡検を行った。

研究成果

当初の予想を大幅に上回る 40 名の参加を得て、本ワークショップ開催の目的は十分に達成されたと考える。日本海側、さらには宍道湖・中海という日本有数の汽水湖周辺での本ワークショップの開催は初めての試みだったが、巡検も含め、これまでのワークショップでは提供しきれなかった新たな知見を参加者は得ることがで

きて有益だったと考える。

第4回までと同様、同研究分野に関する研究推進と相互協力・共同研究、ならびに次世代を担う若手研究者の育成を促進する国内プラットフォームを、代表者・分担者・拠点对応教員らが中心となって構築していくための契機とすべく、今後もワークショップの開催を継続・発展していくことで合意を得た。

成果発表

該当なし

今後の問題点

上述のような、本ワークショップの継続的な開催に対する要望にどう応えていくかが課題である。特に、島根大エスチュアリー研究センターの共催と南先生の多大な尽力を得つつ、当初予定していた人数を遥かに上回る参加者を得ることができたのは望外の喜びであったと同時に、研究発表時間の十分な確保のためにも、開催日数の確保が今後の課題として挙げられる。

